

ドイツの自然と生活

小林 美実



一九九九年三月に私立短大を定年退職した私は、すぐドイツへ飛んだ。これから三ヶ月滞在するハンブルクは、三十五年前に私学研修生として約半年生活したなつかしい所である。出発の日、私は体の中心から頭の天辺へ、スカッとさわやかな「気」が吹きぬけていく感じがした。解放され自由になるとは、こんなに良い気分なのか。今回全く自由な身で、ドイツの家庭生

活を楽しみながら、見たり聞いたりしたいことがある。ドイツは、世界で最も環境問題へのとりくみが進んでいる。私達が知っているのは、ゴミ、フロンガス、原子力エネルギー、最近ではバイオトープなど。人々がこれらの問題を含め、自分達の生活環境をどの様に考え行動しているのだろうか。その中で子ども達が育てられている、と思うと、期待感でいっぱいになっ

た。自由に遊ぶ場も時間も少なく、常に家や学校や施設に、安全と言う理由にしろ閉じ込められがちな日本の子どもと、どう違うのだろう。ドイツも日本同様、出生率は世界最低のレベルにある。子どもに対する親の態度、厳しいと言われる躾はどうなっているだろう。不安も大きかった。

滞在先の友人の家に着いたのは、夕方、しかしまだ明るかった。さつそくケーキとコーヒー、テーブルの上に灯されたローソクの柔い光で迎えられた。「もしよかつたら、少し散歩をしよう」と誘われ、家の横の草地を横切り、川ぞいの林の中の散歩道を歩く。次第に夕闇がせまる川を、時々手漕ぎボートやカヌーが過ぎていく。この川は、市中心の大きな湖、アルスター湖にそそぐ川を、人工的に広くした運河だが、岸辺は草や木で、すっかり自然の姿に戻っている。モーターボート類は禁止。住宅地の川では、当然の事と言う。

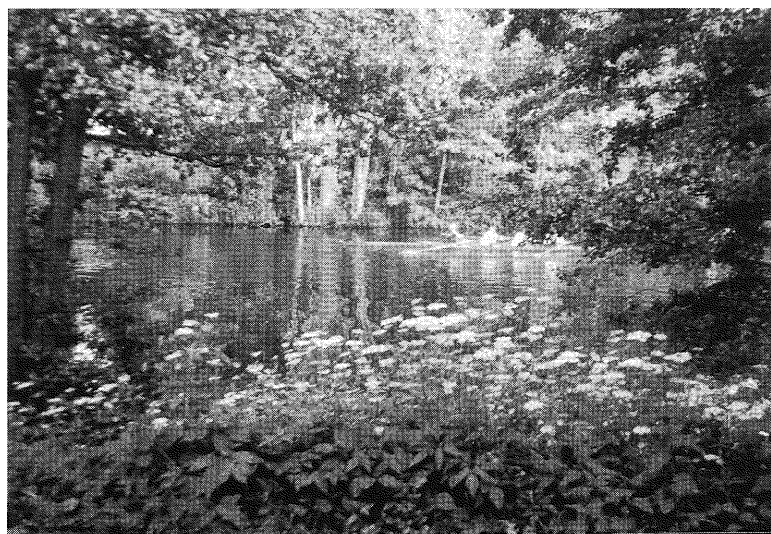
私の生活は、早朝五時に散歩するのが日課となつ

た。三時頃から美しい声で小鳥達が歌い出す。生ゴミが無いためか、鳥はほとんど見かけない。朝霧の中から、釣人や、カヌー、ボートを漕ぐ人、ゆつくりジョギングをする人、散歩する人の姿が現れる。日本でよくみかける、健康のために前方をみつめて懸命に速足で歩く人はいない。皆、まわりの景色、空気、音、時には雨も楽しんで、ゆったりとしている。夕方にはぎやかだ。子ども連れやよく訓練された犬を連れた人が増え、子ども達が草地を駆けまわる。りすが木の上を走り、茂みからは兎も出てくる。

この辺りは、*Klein garden*のエリアがいくつもある。日本では「市民農園」と訳されるが、庭の持てない市民に市が貸し出す土地で、今は農園ではなく、花や木いっぱい庭、日本で流行の、ガーデンングの場である。日本とは全く違い、一ヶ所に小さい所で二十位、大きいエリアでは、庭が延々と続き、一つのコミュニティ、つまり人々のふれあいの場になっていること

だ。そのための集会所のある所もあつた。Kleinとは「小さい」の意だが、広い所は約三〇〇平方メートルもあつて驚いた。皆、思い思いに庭をデザインし、小さい木の小屋を自力で建てたり、スモークの小さい設備を作ったりしている。休日や仕事を終えた夕方や夜、ここに家族や友人で集り、コーヒータイムをすごしたり、食事をしたりしている。庭の間の道を歩くと、手をふったり、声をかけられたりした。日本からの花だ、と得意そうに見せてくれたりする。「庭の手入れが大変でしょう」ときくと、「こんなに楽しいことが、何故苦勞なのか」と妙な顔をされてしまった。

私の友人の家は三階建の少し高級長屋風で、各家に地下室と庭がついている。彼等は常に自分の家の庭に気を配り、美しさを保つ努力を惜しまない。天気の良い休日には、リラの花の下で、朝から食事をとった。娘達が通学の為の自転車を手入れるのも、この気持ち良い庭であった。今ドイツは、昔と違って、食材が実



▲川の岸を散歩して見る風景

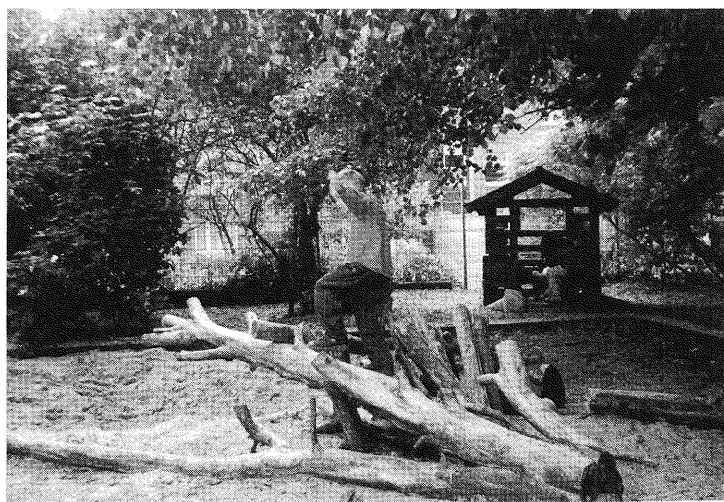
に豊富で、流通機構の改善で、野菜、果物も日本より格段に安い。しかし彼等は、食事より緑の豊かさ、自然の豊さを何倍も大事にしている。心も体も健康になるには、食欲より自然だと言う。さすがワンダーホーゲル発祥の国である。野菜も果物も不揃いだ。

五月中旬頃には、木や草の花が一斉に咲いた。ハイネの詩の「美しい五月」である。市の中心部を除いて、道路には立派な街路樹があり、ビルの間の木も含めて、その太く大きいこと。特にマロニエ（栃の木）には巨木が多く、ローソク型の花が見事だ。東京の霞が関にも同じ木があるが、どうしてどれも背を低く、枝も切ってしまうのだろう。盆栽の伝統のせいだろうか。黄金色のくさり状の花を枝からいっばい下げて咲く木は私の気に入った木で、勝手に、ゴールデン・チェーンと名付けていた。それに大好きな石楠花も、二階の屋根にとどく位立派になっていて、あざやかな花の色で壯観である。歩道には、きちつと自転車専用

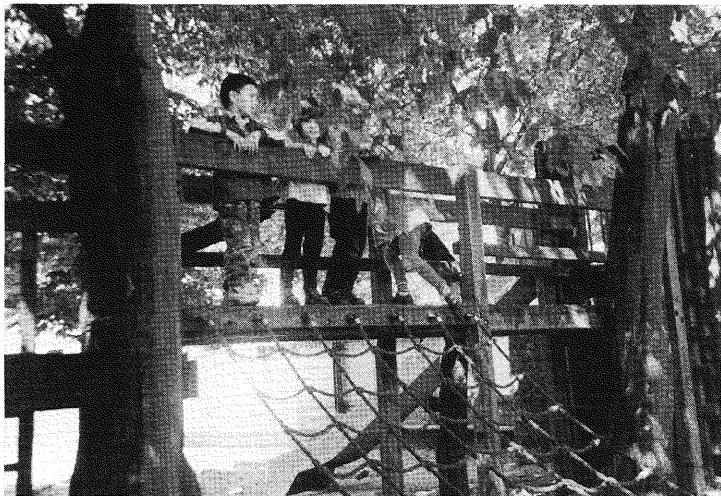
の部分が区別されているから、幼い子どもの手をひいて歩く親の表情もやさしい。草地の野の花や、家々の庭の花を見て、おしゃべりしながら歩いている。歩道は舗装の部分は少ない。土のまま両端は残している。雨がしみ混むだけでない。木の葉や花びらも、土の上に散ったものはきたなくない。駐車場も土のままが多い。車の上には、木の葉や花びら、小鳥の糞まで落ちていて、車が汚れることより、木のあること、鳥や虫が共に生きていることの方が、人間にとって大事だと言う。靴も車も、掃除をすればよい。人間の都合を優先すれば、自然は壊れるのだ。

滞在中、保育園三園を訪れた。どの園も庭は土のまま、大小の木が沢山ある。園長の一人が私に「木が沢山あることは、子ども達にとつて素晴らしいことです」と言った。木の間の木製の橋や塔や小屋は、遊びの拠点になっている。子ども達も左右に上下に走りまわっている。自然の枯木を無造作に組んだだけのシン

ブルな遊具、港町ハンブルクラしく、古い木船を置いて
いる園もあった。保育室の天井からさがる手造りの
モビールも、細い枯枝と木の実でできていた。近所の
森へ遊びに行ったクラスの子ども達が持ち帰ったもの
は、枯枝、落ち葉、小石、枯れ草など。これはどこで
見つけたか、何に見えるか、など、園長先生に見せな
がら嬉しそうに話している。持ち帰ったものを使っ
て、棚の上を飾ったり、器に入れて遊んだりする。日
本なら、ペットボトル、カン、発砲スチロール、空箱
だろう。保育室に置かれた観葉植物は、冬枯れの季節
に緑を楽しませてくれる。各室の先生達が、これらの
植木や草花を、子どもの前で実にやさしく大事に世話
している。しおれた花をちよつとつまんでから、花全
体をみて、鉢の置き方を変えるなど、多分彼等が家庭
で育つ時見ていた親のしぐさだろう。全員が同じ花を
観察しながら育てる様な活動は無いが、子どもをとり
まく環境そのものが、自然に対する気持ちや態度を育



▲保育園の庭の自然木を組んだシンプルな遊具



▲保育園にて 木立ちの間の橋で遊ぶ

てていると感じた。知識でなく、伝えられる文化としての環境教育か。

六月の休日に、市中央の大きな公園で、子どものための「音、音楽、あそび」のフェスティバルが催された。木々の下は、さまざまな色の花でいっぱい。隣のなだらかな芝生の丘は、手作り楽器のエリア。ポランティアの指導で作った民俗楽器風の音具を、丘の上で気持ちよさそうに盛んに腕を大きく動かして音を鳴らしている。若いデザイナーが作った不思議な音のする筒型の奇妙な音具は草の上に無造作においてあり、赤ん坊から大人まで自由に音を鳴らして遊んでいる。満開のバラ園には、生活用品や自動車の部品他、面白い音の出そうな物体がいくつもの枠につりさげられ、子ども達が嬉しそうに音を次から次と鳴らしている。中には興奮して、踊る様にたたいている子どももいる。私は子ども達がバラの間を走りまわったり、花にさわったりしないか、ヒヤヒヤした。全くそういう姿は

なかった。大きな池には水鳥や魚がいるが、ここでも池に小石をなげたり、鳥をおどしたり追いかけたりする子どもはいない。野外ステージでは、いろいろな国のダンスや演奏があつたが、目立つのは老人の姿。やはり子どもは体を動かして遊ぶ方がいいのだろう。芝生の長いスロープを使った遊びや、水鉄砲の遊びでは、都会の子どもなのに、野性味いっぱいの勇しさと元気さだ。服も顔も手足も、草だらけ、泥だらけ、水でびっしょり。

私は電車や列車に乗る時、幼児を連れた母親を見つけて座り、話しかけた。子ども達は、人形劇をとてよく見ている。保育園でも、月に一回位、そして親もよく連れていっしょに見ると言う。特に「カスパ―（伝統的な人形劇の主人公）」は人気の様で、親も子どもの時、それを見て育つた」と言う。乗物の中で見ていると、親は子どもに、社会でのルール（躰と言うより、人々を気持ちよく共生するためのルール）をき

ちつと教えていることがわかる。囲りの人々の態度も一つの良い手本になって思う。電車など公共の乗りものの中で眠る人をあまり見かけない。座っていても、まわりに気を配っている。若者や子どもは、必要と思うとサッと立って席をゆずる。小さい子どもには、親が立つように促している。家でも保育園でも、食事は必ず食べられる分だけを、自分で自分の皿にとることを厳しく言われている。小学校の給食で、山のように毎日残飯が捨てられている日本を考えると、その差に愕然とする。

ドイツでは、子どもは親、まわりの大人を見て育っている。自然への接し方、生活の仕方、外の社会で守べきルールなどの、その基には、大人達が「どの様な生活、どの様な社会や世界を築き、いかに生きるか」を常に考えていることが感じられた。ドイツの自然は、厳密には「自然」ではない。人工である。しかしそれを自然の営みに戻し、保つための努力を惜しまな



▲バラ園で音具で遊ぶ

い。「自然と共に生きる」とは、日本人の本来の生き方ではなかったか。今もなお、物と食中心の華やかな流行的文化（はやりもの文化）の中で、「いやし・ゆとり」のことばが躍る日本の社会のむなしさを感じている。

（鶴見大学短期大学部）

☆前回の「ラオスという国で出会った子どもたち」（第一〇〇巻第二号）の四十四頁五行目の六十一台は一台の誤りでした。お詫びして訂正いたします。
（編集部）